

# 伊良部島方言における述語部分の焦点化について

下地理則

群馬県立女子大学

(shimoji@gpwu.ac.jp)

## 1. はじめに

本稿の目的は、南琉球宮古伊良部島方言（以下、伊良部島方言）の述語部分への焦点標示を記述することである。宮古方言を含め、琉球語諸方言には焦点標示システムが確認されており、そのシステムについて、多くの先行研究が存在する（野原 1984, 内間 1985, 名嘉真 1992, Serafim and Shinzato 2000, Shinzato and Serafim 2003, Shimoji *in.press*）。これらの研究における主な考察対象は、主語や目的語などの名詞句への焦点化と述語の結びの対応である。伊良部島方言を例に挙げれば、以下の (1a) のようなタイプの構文に関心が集まっていたといえる。一方、以下の (1b) に見るように、伊良部島方言を含む宮古語諸方言・その他琉球語諸方言の焦点標示は名詞句だけにとどまらず、述語動詞の語幹の焦点化も生産的である（野原 1998, Hayashi and Takubo 2009）。

- (1) a. *sinsii=ga=du*                      *až-tar.*  
先生=NOM=FOC                      言う-PST  
「先生が言った。」
- b. *sinsii=ga*              *až=du*              *s-tar.*  
先生=ACC              言う=FOC              する-PST  
「先生が言った。」（直訳：言いぞした）

これまでのほとんどの先行研究において、述語焦点化は上記の (1b) のように「V ぞする」のような分析的な構文（動詞語幹＋焦点標識＋軽動詞）として記述されてきた。野原（1998: 411）では、動詞語幹＋焦点標識＋軽動詞の構造が 1 語のような働きをしていると述べているが、その根拠は示されていない。

そこで本稿では、伊良部島方言を対象に、述語焦点化の構造を詳細に記

述する。その結果、伊良部島方言の述語焦点化は（野原の指摘するように）形態論的な現象として扱うべきであることを指摘する。すなわち、以下の(1c)のように動詞の内部に生じる述語焦点接辞（グロスは VFOC）によって行くと記述すべきである。

- (1) c. *sinsii=ga*        *až-dus-tar*.  
先生=ACC        言う-VFOC -PST  
「先生が言った。」(cf. (1b))

上記の新しい分析にともない、2つの重要な問題が生じる。それは、①述語焦点接辞が動詞形態論のどのスロットに生じるのかという問題と、②この接辞が派生接辞なのか屈折接辞なのかという問題である。本稿ではこの2点についても議論する。①に関して、述語焦点接辞は、これまで分かっている伊良部島方言の動詞構造における語幹と屈折接辞の間に生じるという点を明らかにする。さらに、②に関して、この述語焦点接辞自体を屈折接辞として扱ってもよいという結論を示す。このように、述語焦点化という、これまであまり注目されなかった現象は、伊良部島方言の動詞形態論全体の再考につながるほど重要な現象である。

本稿の構成は以下の通りである。まず2節において伊良部島方言の音韻表記を示し、動詞屈折形態論の概説を行う。3節では、いまだ記述の進んでいない伊良部島方言の係り結びについて、その形態統語的な概要を示すことで、それに続く述語焦点の議論の前提とする。続いて4節において述語焦点に的を絞り記述を行う。5節で結論を述べる。

## 2. 伊良部島方言

### 2.1. 表記

本稿では、伊良部島方言の音素分析（Shimoji 2008）に従い、以下の簡易表記を採用する。長母音、長子音は同一音素の連続と解釈し、同一アルファベットの連続を用いて表す（*aa* [a:] 「粟」、*mm* [m:] 「芋」）。なお、*z* は摩擦の弱い [z] ないし接近音化した [z]（無声音のあとでは [s]）に近い音声実態を有する。*r* は音節頭で [r]、それ以外で [ʀ] として実現する（例：*turair*

[*turai*]「取られる」). 括弧つきの音素 (*h, w, e, o*) は, 借用語に偏るなど分布が限られている.

- (2) 子音 : *p, t, k, b, d, g, f, s, c (/ts/), z (/dz/), (h), m, n, v, ž (/z/), r (/r/)*  
半母音 : (*w, j*)  
母音 : *a, i, u, (e), (o)*

## 2.2. 動詞屈折形態論の概観

表 1 に示すように, 伊良部島方言の動詞はまず従接 (風間 2009, いわゆる「きれつづき」) の状態に応じて下位区分される. すなわち, 文末終止可能な定動詞と, 文末終止を行えない副動詞である. 定動詞のうち, 連体終止形は文末終止以外にも連体節の述語になることができる. 副動詞は種類が多く, さまざまな副詞節の述語を形成するが, 本稿では扱わない (Shimoji 2008 を参照).

表 1. 伊良部島方言の動詞

		文末終止可能	テンスの対立
定動詞	連体終止形・終止形	+	+
	希求諸形	+	-
副動詞	接続形・条件形など	-	-

定動詞のうち, 連体終止形と終止形はテンス (過去の *-tar*・非過去の *-Ø/-r*; 詳しくは次節) で屈折する. 一方, 定動詞希求諸形は上記のテンス接辞を伴わず, ムードのみで屈折する.

## 2.3. 定動詞の屈折

以下の表 2, 表 3, 表 4 に定動詞 (連体終止形, 終止形, 希求諸形) の屈折パラダイムを示す. これらの屈折の特徴は後述する.

表 2. 連体終止形（語幹-（否定）-テンス）

	Class 1 <i>mii</i> -「見る」		Class 2 <i>tur</i> -「取る」	
	非過去	過去	非過去	過去
肯定	<i>mii-r</i>	<i>mii-tar</i>	<i>tur-∅</i>	<i>tur-tar</i>
否定	<i>mii-n-∅</i>	<i>mii-t-tar</i>	<i>tur.a-n-∅</i>	<i>tur.a-t-tar</i>

表 3. 終止形（語幹-（否定）-テンス-ムード）

	Class 1 <i>mii</i> -「見る」		Class 2 <i>tur</i> -「取る」	
	非過去	過去	非過去	過去
肯定	<i>mii-r-m</i>	<i>mii-ta-m</i>	<i>tur-∅-m</i>	<i>tur-ta-m</i>
否定	なし	<i>mii-t-ta-m</i>	なし	<i>tur.a-t-ta-m</i>

表 4. 希求諸形（語幹-ムード）

	Class 1 <i>mii</i> -「見る」	Class 2 <i>tur</i> -「取る」
意志形	<i>mii-di</i> 「見よう」	<i>tur.a-di</i> 「取ろう」
願望形	<i>mii-baa</i> 「見たい」	<i>tur.a-baa</i> 「取りたい」
命令形	<i>mii-ru</i> 「見ろ」	<i>tur.i-∅</i> 「取れ」
禁止形	<i>mii-rna</i> 「見るな」	<i>tur-na</i> 「取るな」
否定意志	<i>mii-djaan</i> 「見まい」	<i>tur.a-djaan</i> 「取るまい」

上記の定動詞屈折に関して、注意点を挙げる。

まず、伊良部島方言の動詞語幹には主要な活用クラスが 2 つあり、それによって語尾の形が異なることがある（例えば表 2 と表 3 における非過去肯定の *-r/-∅*、表 4 における命令の *-ru/-∅*、禁止の *-rna/-na*）。Class 1 は */i/* で終わる語幹であり、Class 2 は子音で終わる語幹である。

Class 2 の動詞では、語幹と屈折接辞の間に語幹拡張母音が生じることがある (*tur- + -n* → *tur.a-n*)。拡張母音とその直前の子音との境界は以下の表ではピリオドで表すが、例文では特に表示しない。

表 2 と表 3 に見るように、連体終止形と終止形には肯定否定の形態論的な対立があり、否定接辞の *-n* は、過去テンス接辞の */t/* に同化して *-t* と

して現れる<sup>1</sup>。本稿では肯定否定を屈折として扱う。

表 3 に関して、過去テンス接辞 *-ta(r)* における (r) は、ムード接辞 *-m* (話者の確信を示す接辞) の接続で脱落する (*-tar + -m* → *ta-m*)。

表 3 に関して、終止形には非過去の否定形がない。確信のムードが非過去の否定と共起しにくいという意味的な制限によると考えられる (Shimoji 2009)。

表 4 に関して、希求諸形は語幹にムード接辞を接続させることで形成される。意志形、願望形、命令形、禁止形、否定意志形などが区別される。

希求諸形はこのほか、連体修飾節を伴う名詞句の主要部名詞としての形式名詞が連体修飾節の述語動詞に取り込まれるという文法化によって生じた二次的な屈折形式もある。

(3)    *vva=ga*            *nkai-r*                    *kutu=du*            *a-tar.*  
2SG=NOM        迎える-NPST            OBL=FOC            COP-PST  
「あなたが迎えるべきだった」

(3')    *vva=ga*            *nkai-kutu=du*            *a-tar.*  
2SG=NOM        迎える-OBL=FOC        COP-PST  
「あなたが迎えるべきだった」 (lit. 「あなたが迎えべきだった。」)

上記のような形式名詞起源の屈折語尾は *-kutu* と *-gumata* があり、いずれも「すべきだ」「することだ」などの判断のモダリティや、「するはずだ」などの蓋然性のモダリティを表す。

### 3. 焦点システム

#### 3.1. 焦点標識

伊良部島方言の焦点標識は全てクリティックである。以下に見るように、焦点標識の種類は平叙文、Yes-No 疑問文、Wh 疑問文によって異なる。

<sup>1</sup> 通時的には非過去の *-n* と過去の *-t* は別の形態素にさかのぼる可能性が高い。後者について、否定副動詞語尾 *\*-da* 「-せずに」にさかのぼるとい説がある (沢木 2008)。すなわち、伊良部島方言の *-t + -tar* は、「せずにいた」という分析的な表現から発達した可能性がある。しかしながら、共時的にこの *-t + -tar* を否定副動詞語尾+過去の語尾として分析するメリットがないので、本稿では形態音韻論的な規則を立てることで *-n* と *-t* を同一形態素の異形態として記述する。

- (4) *pžsara=nkai=du iki-i t-tar.*  
 平良=ALL=FOC 行く-CVB.SEQ 来る-PST  
 「平良へ行ってきた。」【平叙文】
- (5) *pžsara=nkai=ru iki-i t-tar(=ru)?*  
 平良=ALL=FOC 行く-CVB.SEQ 来る-PST(=Q)  
 「平良へ行ってきたのか？」【Yes-No 疑問文】
- (6) *pžsara=nkai iki-i t-tar(=ru)?*  
 平良=ALL 行く-CVB.SEQ 来る-PST(=Q)  
 「平良へ行ってきたのか？」【Yes-No 疑問文】
- (7) *nza=nkai=ga iki-i t-tar(=ga)?*  
 どこ=ALL=FOC 行く-CVB.SEQ 来る-PST(=Q)  
 「どこへ行ってきたのか？」【Wh 疑問文】

(5) と(7) に示したように、疑問文における焦点標識は、焦点化されている名詞句以外に、文末にも焦点標識と同音の形式がコピーされることがある((6) については後述)。このコピー形式の出現は現時点では随意的であるとは言いえないが、なんらかの条件にもとづいているかもしれない。今後の調査によって明らかにする必要がある。

このコピー形式は焦点標識と異なる形態音韻論を有している。例えば、鼻音終わりの動詞に接続した際に同化する (*ttam*「来た」(終止形) +=*ru* → *tam=mu?*; 詳細は Shimoji 2008: 448 を参照)。さらに機能の点でも、すでに焦点標識がある場合にも出現可能であることから、焦点化の機能ではなく疑問標識(日本語の「か?」)としての機能を持っていると言える。よって、この文末に生じる形式は焦点標識とは別形態素であると分析する(=Q とグロスを振ってある)。なお、(5) と (6) はともに Yes-No 疑問文であるが、(5) では疑問のスコップが場所「平良」にあるのに対し、(6) では行為の成立を問うという違いがある。(6) の場合、文末にある唯一の=*ru* は随意的であり、かつ焦点標識と異なる形態音韻論を有するので、(5) における文末の=*ru* と同様、疑問標識として機能していると分析できる。

### 3.2. 結びの形

焦点標識が同一節内に出現すると述語動詞の屈折（すなわち「結び」の形）に制限が生じ、終止形をとることが出来ない（Shimoji *in.press*). それ以外の屈折は可能である（宮古諸方言における結びの制限の弱さに関して内間 1985 も参照）. 命令文に関しては、少なくとも自然談話の中に焦点標識と命令形屈折の共起の例がなく、面接調査でも、そのような共起が可能という話者と不可能という話者がおり、今後のさらなる調査が必要である. 以下では平叙文で例示するが、疑問文でも同じ制限が適用される.

- (8) *agu=u=du*                    *jurav-Ø*.  
友人=ACC=FOC                    呼ぶ-NPST  
「友人を呼ぶ」【結び：定動詞連体終止形】
- (9) *agu=u=du*                    *juraba-di*.  
友人=ACC=FOC                    呼ぶ-INT  
「友人を呼ぼう」【結び：定動詞意志形】
- (10) *agu=u=du*                    *juraba-baa*.  
友人=ACC=FOC                    呼ぶ-OPT  
「友人を呼びたい。」【結び：定動詞希求形】
- (11) *\*agu=u=du*                    *jurav-Ø-m*  
友人=ACC=FOC                    呼ぶ-NPST-RLS  
「友人を呼ぶ」【結び：定動詞終止形】

## 4. 述語焦点

### 4.1. 概観

伊良部島方言の述語は動詞述語と名詞述語に大別される. 本稿の考察対象は動詞述語とその焦点化であるが、その議論に移る前に、簡単に名詞述語の構造および名詞述語の焦点化の方法も示しておく. 以下の(12)に見るように、名詞述語は述語名詞句とコピュラ動詞からなる.

- (12) *kari=a*                      *imi-pžtu=u*                      *ara-n-∅*.  
 3SG=TOP                      小さい-人=TOP                      COP-NEG-NPST  
 「彼（女）は小さい人ではない。」

コピュラ動詞は非過去・肯定の場合で、かつ述語が主節の場合には現れない。

- (13) *kari=a*                      *imi-pžtu*.  
 3SG=TOP                      小さい-人  
 「彼（女）は小さい人（だ）。」

以下の (14) に示すように、名詞述語の焦点化は、述語名詞句に名詞焦点のマーカ―を接続させることで行う。

- (14) *kari=a*                      *imi-pžtu=du*                      *a-tar*.  
 3SG=TOP                      小さい-人=FOC                      COP-PST  
 「彼（女）は小さい人だった。」

一方、本稿の考察対象である動詞述語の焦点化では、動詞焦点接辞 (VFOC) を動詞語幹に接続させるという方法を用いる<sup>2</sup>。

- |                         |   |                          |
|-------------------------|---|--------------------------|
| (15) 語幹-屈折語尾            | → | 語幹-VFOC-屈折語尾             |
| a. <i>mii-tar</i>       | → | <i>mii-dus-tar</i>       |
| 見る-PST                  |   | 見る-VFOC-PST              |
| 「見た」                    |   | 「見た」                     |
| b. <i>mii-tar(=ru)?</i> |   | <i>mii-rus-tar(=ru)?</i> |
| 見る-PST                  |   | 見る-VFOC-PST              |
| 「見た？」                   |   | 「見た？」                    |

上で示したように、動詞焦点接辞は通常の焦点標識同様、構文の種類によ

<sup>2</sup> この接辞が正確にどの位置に接続するかという問題と、この接辞が語幹に属するのか屈折に属するのかについては 4.3 で扱う。



って形式が異なる。平叙文用の *-dus*、Yes-No 疑問文用の *-rus* があるが、Wh 疑問文用の動詞焦点接辞は存在せず、この点で名詞焦点標識と異なる。以下では、<*-dus*>という表現で、*-dus* も *-rus* も表すものとする。通時的に見れば、<*-dus*> は (16) のような軽動詞（「する」）を用いた構文を経て発達したと思われる（ほかの琉球諸語について名嘉真 1992 など）。

(16) STEM=*du*                    *s*-INFL  
       語幹=FOC                    軽動詞語幹-屈折語尾

↓

(17) STEM=*dus*-INFL  
       語幹-VFOC-屈折語尾

すなわち、現在の伊良部島方言に見られる <*-dus*> の /*du*/ は、かつては焦点標識のクリティックであったと考えられ、/s/ は軽動詞語幹の一部であったと考えられる。伝統的に琉球語学では、現在の琉球諸語の述語焦点の構造を (16) のように分析することが普通である。それに従えば、<*-dus*> は以下のような構造になっていると記述されるだろう。

(18) *mii=du*                    *s-tar*  
       見る=FOC                    する-PST  
       「見た」(lit. 見ぞした)

しかし現在の伊良部島方言の文法システムにおいて (16) ではなく (17) の構造を想定する必要があるのは、以下の理由による<sup>3</sup>。

- (19) a. フット形成という韻律面の現象に照らして、<*-dus*> が 1 つの形態素として扱われている。  
       b. <*-dus*> の *du* と *s* の間に別の形態素が侵入不可能である。  
       c. <*-dus*> が接続するのは語ではなく語幹である。

<sup>3</sup> 査読者の方より、これらの証拠に加えて意味的な証拠の提示があったほうがよいとの指摘をいただいた。たしかに軽動詞「する」の意味を保持しているかどうかという点は重要である。しかし、筆者の調査不足により、現時点で有意義な議論を行える用意がなく、この意味的な問題については今後の課題としたい。

(19a), (19b) は, <-dus> が単一の形態素であることを示す証拠であり, 通時的に見た場合に最も重要な伊良部島方言の <-dus> の変化特徴である. (19c) はその形態素が (クリティックではなく) 接辞であることを示す証拠である.

以下 4.2 は, 上記 (19) をひとつひとつ検証し, 述語焦点化が接辞によってなされるという分析, 言い換えれば述語焦点化は動詞形態論において扱う現象であるという分析を提案する. それを受けて 4.3 では, <-dus> が動詞のどの部分に挿入されるのかという点を記述し, さらに, 名詞焦点化と同様に語尾の取り方に制限が生じるかどうかを記述する. 最後に, 述語焦点接辞が派生接辞なのか屈折接辞なのかという点についても記述する.

## 4.2. <-dus> の述語焦点接辞としての分析

### 4.2.1. 韻律的に <-dus> が 1 つの形態素として扱われている

伊良部島方言の韻律は, フット形成とトーンの付与という 2 つのプロセスで説明される (Shimoji 2009a). フットは 2 モーラフットが基本であり, 音韻語 (クリティック含む) の左端からフットが作られていく. それによって 1 モーラ余る場合は 3 モーラフットを形成する. 例えば *midum* 「女」は (midu)m ではなく (midum) であり, *banckira* 「グアバ」は (ban)(cki)ra ではなく (ban)(ckira) である.

フット形成には形態素境界も影響する. 紙数の都合上ここで伊良部島方言の韻律の詳細を述べることは出来ないが, <-dus> の分析に関しては以下の点に注目するだけで十分である. すなわち, ある語幹 A に別の形態素 (あるいは異形態) B が接続して合成語 A+B を作る場合, B が 1 モーラであれば, 形態素境界は無視され, 語幹 A と一緒になったうえでフット形成が行われるが (以下の (20), (22) 参照), B が 2 モーラ以上の場合, 形態素境界でフットの境界が入る. よって, この場合 B は必ず独立したフット形成を行うという制限がある ((21), (23) 参照. なお (22), (23) はゼロの屈折を伴った定動詞連体終止形非過去).

- |      |               |      |   |             |          |               |
|------|---------------|------|---|-------------|----------|---------------|
| (20) | <i>budur-</i> | 「踊る」 | + | <i>-na</i>  | (禁止形)    | (budu)(rna)   |
| (21) | <i>budur-</i> |      | + | <i>-tar</i> | (連体終止過去) | (budur)(tar)  |
|      |               |      |   |             |          | *(budu)(rtar) |

- (22) *budur-Ø* + =*ti* (引用「と」) (budu)(rti)  
 (23) *budur-Ø* + =*tii* (= *ti* の異形態) (budur)(tii)  
 \*(budu)(rtii)

語幹 A に 1 モーラの形態素が 2 つ後続する場合と、2 モーラの形態素が 1 つ後続する場合とではフット形成が異なる。例えば以下の例は (20) *budur-na* 「踊るな」にさらに引用のクリティック =*ti* 「と」をつけたものである。フット形成の点で言えば、形態素境界は関係なく、(20) が 1 モーラ分だけ拡張されたにすぎない。それにもとづいて音韻語の左端から通常のフット形成が行われるだけである。音韻語の最終フットは、余りを回避するための 3 モーラフットになっている。

- (24) *budur-* + *-na* (禁止形) + =*ti* 「と」 (budu)(rnati)

同じ語幹に 2 モーラの形態素が接続した (21) と対照されたい。

ここで、上記の語幹 *budur-* 「踊る」に <-*dus*> を加えた形式を考えてみよう。もし <-*dus*> が =*du* (焦点) と *s-* 「する」の 1 モーラ形態素 2 つから成り立っているのであれば、(25a) のパターンに従うはずであるが、実際は (25b) のパターンに従う。

- (25) a. *budur-du-s* 「踊る」 (budu)(rdus)  
 b. *budur-dus* 「踊る」 (budur)(dus)

よって、韻律的な観点から見ると、<-*dus*> は 2 モーラの形態素であると考えることができる。

#### 4.2.2. <-*dus*> の *du* と *s* の間に別の形態素が侵入不可能

前節で韻律面で <-*dus*> が単一の形態素として扱われていることを見たが、形態面でもそれは成り立つ。すなわち、この形式はいかなる形式によっても分断できない。これは焦点 =*du* に軽動詞 *s-* 「する」が後続する別の構文 (27) と比べるとはっきりする。

(26) *ba=a budur-dus-tar.*  
 1SG=TOP 踊る-VFOC-PST  
 「私は踊った。」

(27) a. *ba=a budur=ru=du (a)s-tar.*  
 1SG=TOP 踊り=ACC=FOC する-PST  
 「私は踊りをした。」

b. *ba=a budur=ru=du, unusjuku (a)s-tar.*  
 1SG=TOP 踊り=ACC=FOC かなり する-PST  
 「私は踊りをかなりした。」

(27) では焦点標識と軽動詞の間に副詞の *unusjuku* 「かなり ; そんなに」が挿入可能であるが, (26) では不可能である (他の語, たとえば間投詞の *naugara* 「なんか」, *anu* 「あれ」なども可能). 一方, (27) の述語焦点の場合, 間にいかなる要素も介入できない. なお, (27) において, 軽動詞は /a/ が生じることもある. この異形態 *as-* があることも軽動詞の特徴である. それに対し, (26) のような述語焦点の形式において, <-dus> が /-duas/ のようにはならない.

このように, 形態論的に見ても, <-dus> をひとつの形態素と分析するほうがよい.

ただ, 一点だけ注意すべき点がある. 自然談話資料を書き起こす過程で, <-dus> の /du/ と /s/ の間に談話標識 =*ra* (語調の緩和 ; *softener*) が割り込んだ以下のような例を 1 例だけ確認している.

(28) *vva=ga mii=du=ra s-∅.*  
 2SG=NOM 見る=FOC=SFN する-NPST  
 「あなたが見るのよ」(命令を和らげる口調として)

しかし, この例はこの自然談話の話者である 102 歳 (2007 年当時) の話者からしか収集できておらず, かつ他の話者によると, こういう言い方は現

在では普通しないという。この年齢層以上に見られる古い表現なのか、たまたま出現した言い淀みなのか、今後の調査が必要である。この例がかつて実際に生産性を持っていたのであれば、4.1 で考察した通時的な発達過程における (16) の構造を反映していると考えられる。

#### 4.2.3. <-dus> が接続する語幹は拘束形式

前節までで、<-dus> が1つの形態素であることを韻律面、形態面から示した。本節ではその形態素がクリティックではなく接辞であることを示す。

クリティックは統語的には句をスコープに入れており、句を単位に接続する。音韻的には句の終端の語に接続する。したがって、クリティックは必ず自由形式にのみ接続する<sup>4</sup>。

以下に見るように、Class 1 の動詞語幹 (2.2 参照) は拘束形式であり、これに <-dus> が接続可能であることから、<-dus> がクリティックとは異なることが分かる。

(29)	<i>mii-</i>	「見る」	+ <i>-dus</i>	→	<i>mii-dus</i>
	<i>nkai-</i>	「迎える」	+ <i>-dus</i>	→	<i>nkai-dus</i>
	<i>idi-</i>	「出る」	+ <i>-dus</i>	→	<i>idi-dus</i>

Class 2 の動詞語幹は見かけ上、ゼロで屈折する定動詞連体終止形非過去と同形である。よって、例えば (31) で <-dus> が語幹に接続しているのか屈折した連体終止形に接続しているのかすぐには判定できない。

(30) *budur-* 「踊る」(語幹)

*budur-∅* 「踊る」(定動詞連体終止形非過去)

(31) *budur-dus*

<sup>4</sup> ただし、ごく少数の例外がある。例えば1人称単数の代名詞 *ban* と主格クリティック=*ga* は音韻的に融合し、*ba=ga* となる。この際、*ba-*は拘束形式である。*=ga* は、この場合を除き、必ず自由形式に接続する。よって、1人称単数代名詞との結合の際にのみ生じる例外的な形態音韻変化であると言える。(29) に見る動詞語幹と <-dus> の結合は事情が異なる。<-dus> は規則的に、Class 1 の動詞語幹 (すべて拘束形式) に接続可能である。

しかし、*budur-dus-tar* (踊る-VFOC-PST)「踊った」(定動詞連体終止形過去)のように、さらに過去の接辞を加えることができることから、<-dus> が屈折した語形に接続しているという可能性は否定される。つまり、<-dus> は拘束形式の語幹に接続しているのである。

次に、選択制限の点でも、<-dus> が接辞であるという分析が妥当である。クリティックは句を単位に接続するので、音韻上のホストである句末の語の品詞は 1 つに限られない。一方、接辞は名詞語幹専用、動詞語幹専用、というのが普通である (Shimoji 2008)。この特徴に照らせば、<-dus> は直前の語幹が動詞語幹のみであり、この点でもまたクリティックとは異なり接辞的である。

### 4.3. 動詞屈折形態論と述語焦点接辞

これまで、<-dus> が述語焦点接辞として分析できることを見た。すなわち、<-dus> は動詞形態論で扱うべき形式である。よって、この接辞が動詞のどのスロットに立つのか、という点を記述しなければならない。さらに、4.1 で述べたように、述語焦点接辞が係り結び構文から発達したことに関連して、この接辞が出現した際に屈折語尾に制限が生じるのかという問題も考察する必要がある。最後に、この接辞が屈折接辞なのか派生接辞なのか、という問題が生じる。以下、これらの 3 つの点について順に記述する。

#### 4.3.1. 述語焦点接辞の出現位置

伊良部島方言の動詞の形態構造は以下のように定式化される。

(32) [語根 (-使役) (-受け身) (-尊敬)]<sub>語幹</sub> (-拡張母音) -屈折

以下の例に見るように、<-dus> は、語幹の最後尾、すなわち尊敬の接辞より後、2.2 で見た屈折接辞より前に接続する。

(33) *zau-midum-gama-ta=kara=du unusjuku budur-as-ai-tar.*  
よい-女-DIM-PL=から=FOC      たいそう      踊る-CAUS-PASS-PST  
「いい娘さんたちから (先に)、たいそう踊らされた。」

(33') *zau-midum-gama-ta=kara unusjuku budur-as-ai-dus-tar.*  
 よい-女-DIM-PL=から たいそう 踊る-CAUS-PASS-VFOC-PST  
 「いい娘さんたちから、たいそう踊らされた。」【<-dus>は使役接辞と受け身接辞のあとに出現】

(34) *tin=kai=du ur-ama-tar.*  
 天=ALL=FOC いる-HON-PST  
 「天にいらっしやった。」

(34') *tin=kai ur-ama-dus-tar.*  
 天=ALL いる-HON-VFOC-PST  
 「天にいらっしやった。」【<-dus>は尊敬接辞-(r)ama のあとに出現】

なお、<-dus> が接続する際、Class 2 語幹は拡張母音をとらない。よって、<-dus> が生じる際の承接関係は以下のようなになる。

(35) [語根 (-使役) (-受け身) (-尊敬)]<sub>語幹</sub><-dus> -屈折

上記の承接関係において、<-dus> が語幹に属するか屈折に属するかが明確ではない、これは 4.3.3 で検討する。

#### 4.3.2. 述語焦点接辞と語尾の制限

<-dus> が出現すると、語尾に明確な制限が生じる。すなわち、定動詞連体終止形でしか屈折しない。これは伊良部島方言の通常の焦点化（項や補部などの焦点化）よりも制限が強い（3.2 参照）。これまであげた述語焦点化の全ての例で、述語動詞は連体終止形として屈折している。

#### 4.3.3. 述語焦点接辞は屈折か派生か

4.3.1 で明らかにしたように、述語焦点接辞はあらゆる派生接辞に後続し、一番屈折接辞に近い位置に立つ。よって、この接辞が屈折接辞であるという可能性もある。以下ではそれを簡単に検証してみたい。

本稿では、屈折と派生の区別は程度問題であるという考え方に従う (Bybee 1985, Corbett 1987, Plank 1994, Haspelmath 1996) <sup>5</sup>. ここでは述語焦点が伊良部島方言の典型的な屈折接辞にどれほど近いかを議論してみたい. 一般的に、屈折は以下の特徴を持っていると考えられる (以下の (36a-b) は Haspelmath 1996: 47 の提案する3つの特徴のうち2つ, (36c) は Zwicky and Pullum 1983, Bybee 1985) <sup>6</sup>.

- (36) a. 規則性が高い (語幹と組み合わせたときに予想外の機能を持つことが少ない)
- b. 一般性が高い (語幹の語彙的な制限によらず適用される)
- c. 語形成を閉じる (その接辞の接続で語として自立し、その際、それ以上の接辞の接続が許されない)

Anderson (1992) や Booij (1996), Bickel and Nichols (2007) などの類型論的研究では、さらに以下のような統語的な特徴も重要であるとされる.

- (37) 統語条件に左右される (例えば名詞の性・数に応じて変化するドイツ語の形容詞屈折, 従接に応じて語形を変える日本語や伊良部島方言の動詞屈折など)

伊良部島方言の典型的な屈折接辞はムード接辞 (例えば意志形の *-di* 「-しよう」) である. (36) に関して、この接辞は高い規則性を持ち、ほぼどのような動詞語幹にも接続するため高い一般性を持つ. しかも、この接辞の接続によって動詞は自立し、さらに接辞を接続することができなくなる. (37) に関して、ムード接辞を伴った定動詞は文末終止の述語としてのみ機能する. すなわち、文末終止という統語条件に左右されている.

ムード接辞ほどではないが、テンス接辞もかなり屈折的である. まず (36)

---

<sup>5</sup> 伊良部島方言の文法 (Shimoji 2008) の記述においては屈折形態論と派生形態論に二分して整理し、グレイゾーンのケースは個別に取り上げるというスタンスに立った. グレイゾーンとして問題になるのは、日本語と同様 (風間 1992), 否定のカテゴリーである. なお、述語焦点は否定より後に出現する (後述する表 4 参照).

<sup>6</sup> Haspelmath (2004) は、上記の (36a-b) に加えて「高い生産性」を挙げているが、本稿筆者にとってこれと (36b) との相違が明確ではないため、ここでは採用しなかった.



に関して、テンス接辞は (36a-b) を満たすが、(36c) を完全には満たさない。すなわち、連体終止形の場合はテンス接辞の接続を持って語を自立させることができるが、そのあとにムード接辞を接続して終止形を形成できる (2.3 の表 3)。 (37) に関して、テンス接辞は定動詞の特定の形式 (終止形と連体終止形) にしか出現しない。定動詞と副動詞は統語的な条件で選択されるのだから、テンス接辞の出現可能性は、統語的な条件に左右されているといえる。

ここで <-dus> について考察してみると、この接辞はテンス接辞ほどではないが、屈折と派生の両端のスケールで考えれば屈折的であることが分かる。まず、この接辞は高い規則性を持つ。すなわち、どの語幹に接続しても、述語焦点化という機能だけを持つ。さらにこの接辞は一般性が高い。筆者の調査では、述語焦点化ができない語幹はコピュラ動詞だけである。コピュラ動詞は名詞述語文を構成する要素であり、名詞述語の焦点化は名詞に通常の焦点標識を接続することで行う (4.1 参照; 下地 2009)。コピュラ動詞が <-dus> によって焦点化できないのはこのような理由があり、不規則的なギャップではない。一方、<-dus> は語を閉じる性質を持っていない。例えば、*budur-dus-tar* (踊る-VFOC-PST) 「踊った」のように、あとに屈折接辞を接続しなければならない。テンス接辞はそれで語を自立させることができる点で(36c)の一部を満たしていたが、<-dus> は (36c) を完全に満たさない。

(37) について、<-dus> は統語的な条件に左右されている。まず、この接辞は節内のほかの要素に焦点標識が接続していない場合にのみ出現可能である。次に、この接辞は定動詞連体終止形にのみ出現可能である。連体終止形は文末終止位置と連体節の述語という位置で生じるが、連体節内部に焦点標識が生じないという別の制限があるため、結果的に主節の文末終止位置に限定される。このように、述語焦点の出現を記述する場合は以上のような統語環境に言及しなければならず、(37) を満たしている。

以上のように、<-dus> は、テンス接辞に次いで屈折的であると言える。したがって、伊良部島方言の記述においてはこれを屈折形態論で扱ってよいだろう。その際、屈折カテゴリーをどのように立てるかという問題が生じるが、これはラベルの問題であり、言語事実の記述において大した問題

ではないと思われる (Haspelmath 1996: 49). 仮に, 焦点標示というカテゴリーを立て, 述語焦点の有無を屈折パラダイムに組み込んだ場合の案を以下に書いておく. なお, 前節で述べたように, 焦点形は連体終止形に限られるので, 連体終止形のサブパラダイムとして整理する.

表 4. 連体終止形 (語幹- (否定) -(焦点)-テンス)

		Class 1 <i>mii</i> -「見る」		Class 2 <i>tur</i> -「取る」	
		非過去	過去	非過去	過去
非焦点形	肯定	<i>mii-r</i>	<i>mii-tar</i>	<i>tur-∅</i>	<i>tur-tar</i>
	否定	<i>mii-n-∅</i>	<i>mii-t-tar</i>	<i>tur.a-n-∅</i>	<i>tur.a-t-tar</i>
焦点形	肯定	<i>mii-dus-∅</i>	<i>mii-dus-tar</i>	<i>tur-dus-∅</i>	<i>tur-dus-tar</i>
	否定	<i>mii-n-dus-∅</i>	<i>mii-n-dus-tar</i>	<i>tur.a-n-dus-∅</i>	<i>tur.a-n-dus-tar</i>

## 5. おわりに

本稿では, 伊良部島方言を対象に, これまであまり研究されてこなかった述語焦点化について記述した. その結果, これまでの大半の解釈(「見ぞする」のような軽動詞構文)と異なり, 述語焦点化が形態論的な現象であることが明らかとなり, かつ屈折接辞として解釈可能であることも明らかとなった.

## 参考文献

- Bickel, Balthasar, and Johanna Nichols. (2007) Inflectional morphology. In Shopen, Timothy, ed., *Language typology and syntactic description* (3), 2nd edition, 169–240, Cambridge: Cambridge University Press.
- Booij, Greet. (1996) Inherent versus contextual inflection and the split morphology hypothesis. In Booij, Greet, and Jaap van Marle, eds., *Yearbook of morphology 1995*, 1–16, Dordrecht : Kluwer Academic Publishers.
- Bybee, Joan L. (1985) *Morphology: a study of the relation between meaning and form*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamin's Publishing Company.
- Corbett, Greville G. (1987) The morphology/syntax interface: evidence from possessive adjectives in Slavonic. *Language* 63: 299–345.

- Haspelmath, Martin. (1996) Word-class-changing inflection and morphological theory. In Booij, Greet, and Jaap van Marle, eds., *Yearbook of morphology* 1995, 43–66, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Hayashi, Yuka, and Yukinori Takubo. (2009) Kakarimusubi in Miyako Ryukyuan. Paper read at the 1<sup>st</sup> Workshop on Ryukyuan Languages and Linguistic Research. UCLA.
- 風間伸次郎. (1992) 「接尾辞型言語の動詞複合体について」宮岡伯人 (編) 『北の言語－類型と歴史』, 241–260, 東京：三省堂.
- 風間伸次郎. (2009) 「副動詞の類型論的研究」記述言語学研究会口頭発表. 東京外国語大学.
- 名嘉真三成. (1992) 『琉球方言の古層』東京：第一書房.
- Plank, Frans. (1994) Inflection and derivation. In Asher, R. E., ed., *The Encyclopaedia of Language and Linguistics* (3), 1671–1678, Oxford: Pergamon Press.
- Serafim, Leon A. and Rumiko Shinzato. (2000) Reconstructing the Proto-Japonic *kakari musubi*, \*-ka ...-(a)m-wo. *Gengo Kenkyū* 118: 81–118.
- Shinzato, Rumiko, and Leon A. Serafim. (2003) *Kakari musubi* in comparative perspective: Old Japanese *ka/ya* and Okinawan *-ga/-i*. *Japanese/Korean Linguistics* 11: 189–202.
- Shimoji, Michinori. (2008) A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan language. A PhD thesis, the Australian National University.
- Shimoji, Michinori. (2009a) Foot and rhythmic structure in Irabu Ryukyuan. *Gengo Kenkyū* 135: 85–122.
- Shimoji, Michinori. (2009b) Epistemic modality in Irabu Ryukyuan. *Shigen* (Tokyo University of Foreign Studies Descriptive Linguistics Papers) 5: 25–42.
- Shimoji, Michinori. (*in.press*) Quasi-Kakarimusubi in Irabu. *Japanese/Korean Linguistics* 18: 114–125.
- 内間直仁. (1985) 「係り結びの係りの弱まり－琉球方言の係り結びを中心に」 『沖縄文化研究』 11: 223–244.
- Zwicky, Arnold M., and Geoffrey K. Pullum. (1983) Cliticization vs. inflection. *Language* 59: 502–513.